

(^_^)v 趣味に生きる (第32回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

楽器いじり～その1 管楽器

菊池 春人

(慶應義塾大学医学部 臨床検査医学)

◆はじめに

ずうずうしくも本コーナー執筆2回目になります。前回は趣味とちょっと違うかな、というところを書いたのですが、そのときに「本来の小生の趣味は、シンセサイザーを演奏すること、にしている」と書いたのですがこの原稿の依頼が降ってきました。本業界(何の業界?)では非常に立派に楽器を演奏なさる先生方が多くいらっしゃって、本コーナーでもかなり執筆されておられます。小生は楽器演奏が大好きですが、このような先生方に立ち向かうにはゲリラ戦術しかないのです、上記のシンセサイザーも含めいろいろな楽器を演奏することに挑戦することで対抗しています。というわけでもないのですが、どうしてもいろいろな楽器を演奏してみたい、という欲求が強く、ひとつの楽器を極めることができない、というところが本当かなと思っています。まあ、本当にいじり始めて種類が増えてきたのはここ5,6年でしょうか。ちなみに楽器が好きという点では浜松市楽器博物館は小生にとってのパワースポットであり同地で学会があるときにはなんとか時間を作って必ず行くことにしています。菅野剛史先生(当時浜松医大)が集会長をされた日本臨床検査医学会の時には、学会場のすぐとなりであったので、合間をぬって2日続けて通った覚えがあります。

本稿の楽器いじりというタイトルは、もともと「演奏してみたい」、というのが原点なので、単に集めるだけではなく、すべての楽器について一応人前で曲が演奏できるレベルを目指して

はいる、という意味をこめてつけてみました。実際は残念ながら今のところはそのレベルに達しているものはほとんどないといってもよいのですが…。ただ、どんな構造になっていて、どのように演奏するか、ということはわかっている(つもりなので?)、小生が持っている(演奏を試みている)楽器について蘊蓄を語らせていただくことにします。それなりの数の楽器を紹介するので、2回に分けさせていただきます。一応楽器の系統別に書いていくこととして、今回は管楽器を紹介させていただき、次回は電子楽器を中心にその他の楽器となる予定となっています。ですので、小生が購入した順番とは異なっていることはお断りしておきます。

◆エアリード楽器

1. なぜ管楽器か?

今回7つの管楽器について記しますが、それ以外にも持っている、あるいはこれまで持っていた楽器はいくつかあり、また、欲しいなど思っているものもまだあったりします。なぜそんなに管楽器が好きなのかは自分でもはっきりとはわかっていません。おそらく、一人で演奏しても面白い、あるいは人前で演奏できる楽器で珍しいものが多い、ということがあるのかなと思います。また、管楽器は感情を込めやすいというか、表情を付けやすいところがあって、初心者でも演奏するとそれなりに聞こえるからかなとも思っています。

2. リード, エアリード楽器とは

管楽器を演奏される方はもちろん、管楽器といっしょに演奏されたことのある方はご存じとは思いますが、あまり楽器になじみのない方もいらっしゃるので説明しておきたいと思います。リードとは通常振動させて音を出させる薄い板状のものを指します。あとで出てくる Xahoon についているもの(テナーサクスのリード)がわかりやすいと思います。しかし、広い意味では管楽器はすべてリード楽器というとならえ方ができるようです。トランペットのような金管楽器やフルートには振動する薄い板はありませんが、金管楽器は唇を振動させてリードとしているリップリード楽器とされています(あまりこの言葉は耳にしませんが)。また、フルートのように空気の流れを角(エッジ)に当てて音を出すものを、エアリード楽器(あるいはノンリード楽器)といいます。ビール瓶を吹いて鳴らしたことのある方も多いかもしれませんが、それと同じ原理です。エアリードの中で、エッジを組み込んで、単に息を吹き込めば音が出るようになっている部分をブロック(フィップル)といい、リコーダーやオカリナはブロックのあるエアリード楽器ですが、今回御紹介するのはケーナ、尺八、篠笛、サンポーニャ、パンフルートでブロックのないものばかりです。一般にこれらの楽器は音を出すのがむずかしいとされるのですが、小生は小さいころからビール瓶など瓶を吹いて鳴らすことが好きだったせいか、最初にいじったフルートでもそんなに悩んだ覚えがなく、あとの楽器は基本的にはフルートと同じような吹き方をすれば音が出たので、吹き始めたときから音が出せています。そのため、ケーナで音がなかなか出せない、という人にはビール瓶を吹いて音を出すことから始めてみることを勧めています。

3. 横笛～篠笛～

横笛といえばみなさんが思いつかれるのが、フルートだと思いますが、これはよくご存じと思うので詳しい説明は省略します。小生も持っ

ては娘に買ってあげたのですが娘は音を出すところで断念)、音域の広くない曲であれば音色はともかく一応演奏はできるといえばできますが、とても人前で披露できるレベルではありません。ここで紹介するのは篠笛で、これも吹いておられる方を存じていますが、実物を間近で見た方はそれほど多くないかと思います。篠笛は長さによって全体の音の高さ(調子)が変わり、「何本調子」という呼び方をしますが、小生の持っているものは比較的ポピュラーな八本調子です(写真1-上段)。今回紹介する管楽器はフルートのようにキーはなく、すべて指で穴を直接押さえるものばかりですが、篠笛は7つの穴があって左手の人差し指から薬指、右手の人差し指から小指で押さえることとなります(写真1-下段)。小生の楽器遍歴のなかでは篠笛は比較的新しく、まだ1年たっていません。購入したのが、アキバのヨドバシカメラで、たまたまヨドバシで売っていたのでつい買ってしまった、というところ(最近アキバのヨドバシには置いていないようです)。一応ひととおり音は出せますが、右手指の押さえ方が今ひとつうまくいっていません。他の楽器は指尖部(指の頭)に近い指の腹で穴をふさぐのですが、篠笛の右手は第1関節(遠位指節間関節)と第2関節(近位指節間関節)の間で穴を押さえるのでこの感覚がなじみず、きちんと穴がふさがっていないことではば音がちんとでていない、という段階です。



写真1 篠笛

上段：全体，下段：演奏中

これはまだまだ修行が始まったところです。その後買った尺八に押されて、あまり吹いている時間は多くないのですが、ときどき思い出して練習するようにはしています。

4. 縦笛～ケーナ、尺八～

a. ケーナ

ケーナはご存じの方が多いと思いますが、サイモンとガーファンクルの「コンドルは飛んでいく」が有名となったきっかけではないかと思っています。東京ではよくあちこちの駅でアンデスの民族音楽、フォルクローレを演奏しているグループがあるので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。

小生としてはケーナがここ10年ぐらいでは一番演奏している時間が長く、人前でもしばしば演奏している楽器でお耳をけがされた方が本稿の読者にもいらっしゃるかと思います(写真2-左)。今持っているのが、写真2-右の3つで、短い方の2つが通常のケーナ、一回り長いもの(向かって右)が少し音程が低く(2全音)、通常のケーナの最低音(一番下の穴は開けたとき)



写真2 ケーナ

左：演奏中，右：現在所有の3つ

がラに対してファとなるのでファと呼ばれています。実は最初買ったのがこのファで20数年前、銀座の山野楽器で買った記憶があります。やはり少しへそ曲がりなので、通常のケーナでなく、ちょっと変わったものをということでファから入ったこととなります。さらに長さが長く音程の低いケナーチョというものもあり、それもちょっと欲しいなと思っています。その後7～8年前にある会で演奏する機会があり、そのときに残りの2つを同じ日に買いました。最初向かって左のやや太くて短い色の濃いヤマハのもの(小さくてわからないかもしれませんが、YAMAHAのロゴが入っています)を渋谷のヤマハで買ったのですが、いまひとつ気に入らず錦糸町の島村楽器に行ったら河辺晃吉さんというケーナ奏者の製作したものが売られていたので、ダブリかまわず買ってしまいました。この真ん中の河辺ケーナが現在一番よく吹いているものです。ケーナは小生が説明するときにはアンデス尺八としているように、尺八と同じ竹を材料にしているものが多いのですが、ヤマハのケーナは樫(オーク)でできています(他2つは竹)。なかには人間の大腿骨で作られたものがあるそうです。表側に6つ裏側にひとつ、計7つの穴が空いています。

穴の押さえ方のスタイルに大きく2つありますが、小生は裏の穴を左手の親指、前の上の方の穴を左手の人差し指から薬指の3本、下の方の穴を右手人差し指、中指と小指で押さえるやり方です。上端のUの字の切れ込みのところ息を吹きかけて音を出します。音域は約2オクターブ、エアリード楽器は共通してオクターブは唇で息の速さ(イメージとしては息の太さ)を調整して出すこととなりますが、小生はまだ高い方のミから上は今ひとつ安定しておらずここは修行中です。

演奏する曲目ですが、やはりケーナというとフォルクローレの定番、「コンドルは飛んでいく」と「花祭り」がまだ初心者を受け取らない小生でもそれなりに聞こえるので、どうしても演奏機会が増えますが、その次のフォル

クローレの曲となると、とたんに知名度が落ちるし適当な曲があまりなく、むずかしいところです。日本の民謡や映画音楽や、クラシックも演奏できるのですが、いまひとつ受けないしあまりかっこよく聞こえないところがあります。最近の持ち曲としては、NHKの朝の連ドラ、あまちゃんで大ヒットした「潮騒のメモリー」ですが、今となっては少し時期外れとなってしまい、次の曲の開発が急がれています。何か曲の提案をいただければトライしますのでぜひお願いします。

ケーナは音が出れば、指使いはそれほどむずかしくなく、音色がよいので初心者でも前述の「コンドルが飛んでいく」などはそれなりのレベルでのお披露目ができるようになるので、お勧めの楽器のひとつかなと思っています。

b. 尺八

尺八を知らない方はいらっしゃらないと思いますが、そのわりには直に演奏を聞かれたことのある方はそれほど多くないのではないかと思います。小生の楽器のなかでは最近(昨年12月)に購入して吹き始めたばかりで、現在2番目に新しい楽器となっています。尺八もいろいろな長さのものがあ、小生の持っているものは標準的な1尺8寸で、これが尺八の語源といわれています。竹が基本ですが、小生のものは初心者用ということもあり、木で作られていて、見た目は竹に似せてあるものです(写真3)。上端前側が斜めに切り落とされたようになっており、ここを歌口といいます。内側に固いものがはめ込んでありここに向かって息を吹きかけて音を出します(写真3-右下)。穴の数は標準的なものは後ろにひとつ、前に4つの5つですが、7つのものもあるようです。他のエアリード楽器と比べて穴の数が少ないため、そのままでは音階が出せないため穴を少しふさぐ(開ける)ことで音を作ります。ということで微妙な音程になるわけですが、これが尺八の特徴でもあることとなります。ちなみに、ケーナなどでも半音を出すときは穴を一部開けます。尺八は音を出



写真3 尺八

左：銘柄 裏側，右上：演奏中，下：歌口

すのがむずかしいといわれますが、その点はケーナをやっていたので音を出す自信はありました。実際音の出し方の感覚はほぼ一緒といってもよいと思います。ただ、いまのところオクターブの切替がうまくいかず、オクターブ上の最低音(尺八でいう口の音)が高い倍音になってしまうことが多く苦戦しています。また、首振り3年というように、独特のビブラトをつけられないと、演奏できているというレベルではないので、この点はまだまだこれからです。最近ケーナとならんで一番練習している楽器で、曲としては民謡(ソーラン節、五木の子守歌など)をやっていますが、お披露目できるのはずっと先のようなです。

5. パンフルート～パンフルート(パンの笛), サンポーニャ～

通常の管楽器が、管の長さを変えて音程を変えるのに対して、長さの違う管を組み合わせてそれぞれの管を吹くことで違う音程の音を出すものを、総称してパンフルート(パンパイプ)と呼んでいます。パンはギリシャ神話の牧神パーンに由来して、葦を切って楽器を作ったことからパンフルート(パンパイプ)という名前がついています。パイプオルガンや雅楽の笙も音程を変える原理からはパンフルートの仲間になります。小生はパンフルートを2種類持っていて、ひとつはケーナとならんでアンデスの民族音楽、フォルクローレで用いられるサンポーニャ、もうひとつがルーマニアで改良されて楽器として確立された(狭義の)パンフルートの初心者用のものです。どちらも音の出し方は、他のエアリードの楽器同様に管の奥の縁に向かって息を吹きかけて音を出します。

a. パンフルート(パンの笛)(写真4)

小生が持っているのが「パンの笛」として売られていた練習用のプラスチックのものです。かなり以前に買ったのですが、少し吹いてみてむずかしいと思ってそのままお蔵入りして一時行方不明になっており、今回原稿を書くに当たって探し出しました。楽器としてはシンプルな楽器ですが、何がむずかしいかというと、通常の管楽器は唇と音が出る部分を大きく動かすことはなく、指で穴を押さえて音程を変えるわけですが、パンフルートは管を変える必要があり、動かしたときにどうしてもきちんとした音の出る位置に唇が来ない(エアリードの楽器は唇と管の位置関係が音を出すのに非常に重要)、というところにあります。口の方を動かさず、手を動かしてなるべく管と唇の位置関係を保つようにするとよいようなので、今回執筆にあたり改めて練習してチューリップぐらいは吹けるようになりました(笑)。というわけで少し自信が付いたので、またちょっとがんばってみるかもしれません。

パンフルートは前述のようにルーマニアで楽器として確立したのですが、このときに小生の持っているような少し弯曲した形になり、ザンフィル Gheorghe Zamfir によって広まり、演奏も有名となっています。ただ、小生が最初に買ったパンフルートのアルバムはやはりルーマニア出身の女流パンフルート奏者のダーナ・ドゥラゴミール(Dana Dragmir)のパン・イズ・アライズです。とはいえ、CDより先にパンフルートを買ってあとからパンフルートの曲をさがしてこのCDが見つかった、という形なのですが、とてもすばらしい演奏で結構お勧めのCDでダーナ・ドゥラゴミールがクイーン・オブ・パンフルートと呼ばれるのも納得できるものです。You Tubeで Dana Dragmir で検索するといくつか演奏している動画が見つかりますので、一度ご覧いただけるとよいかと思います。



写真4 パンの笛 パンフルート演奏



写真5 サンポーニャ

b. サンポーニャ(写真5)

これも街頭でフォルクローレを演奏しているので、ご覧になったことがあるかもしれません。小生の持っているものは、前後2列になっているものです。楽器店で買ったものですが、民芸用で管の数も少なく、ほんとの楽器といえるレベルのものではありませんが、一応音は出せます。半音を含め3列になっているものもあります。管の長さは手前と奥が交互の順番にならんでおり、音程が変わるときに横への移動が少なくなるようになっていきます。こちらもパンフルート同様違う音を吹くときにどうしても位置が一定せず、きれいな音がでていませんが、現在「コンドルは飛んでいく」を修行中です。これができそうになったら、本当の楽器レベルのものを購入しそうな気がします。

◆シングルリード楽器～Xaphoon

(ポケットサクスの～)

1. シングルリード楽器とは

リードが一枚の楽器で、代表的なものはクラリネットやサクソホン(サクスの)です。通常リードの材料としては葦がよく用いられています(小生のXaphoonについては後述)。クラリネットは少し吹いたことがあるのですが、現在は持

っていません。サクスはテナー(およびソプラノ)が欲しいと思っていますが、置き場所、練習場所(今は練習用にかなり消音できるバックもあるようですが)で今のところはがまんしています。

2. Xaphoon(ザフーン；ポケットサクス)

今回紹介する楽器の中でたぶん一番珍しいもので、ひょっとしたら本誌の読者でも実物を見ることはもちろん、名前も聞いたことがない方がほとんどではないか、というぐらいのもです。同じシングルリード楽器であるクラリネット、サクスを演奏される方でもあまり知られていないのではないのでしょうか。御茶ノ水のイシバシ楽器で見かけて、買ってしまいました。ハワイのマウイ島で生まれた小さな楽器で、見た目はいわばリコーダーにリードがついているようなものですが、それなりの音量が出ます(写真6)。この程度の長さの楽器のくせに比較的大きなサクスであるテナーサクスのリードを使います。クラリネットやサクソホンではマウスピースがありますが、これは本体に一体化されていて、そのままリードを固定するようになっています(写真6-右下)。おもちゃのように見えるので、最初バカにしていたのですが、音がちゃんと出せず、やはりきちんと取り組まな



写真6 Xaphoon

左：表側，右下：リード部分

いといけないと思ってきちんとくわえたら音が出せました(笑)。後ろに1つ，前に7つ，計8つの穴が空いており，右手の親指以外はすべて使うこととなります(リコーダーやケーナよりひとつ多い)。説明上分かりやすくするため，ポケットサクソとも呼ばれますが，音色はどちらかといえばクラリネットの方に近いと思います。上手な演奏者が吹くとそれなりに立派な楽器になります。日本でも愛好家はかなりいて，You Tubeでも演奏が多くアップされています。小生は最低音のドがときどき音がひっくり返りますが，「聖者の行進」とか「タブー」(古い話ですが，ドリフターズに加藤茶の「ちょっとだけよー」で流れる音楽)はホントの余興ですが，楽器紹介として演奏したことがあります。

リードですが，小生が使っているのは写真6-右下のようにプラスチックリードです。最近，クラリネットやサクソではやっているもので，生意気にもインターネット情報でXaphoonにも良いといわれていたので，つい買ってしまいま

した。本当はもう少し薄めのものがよいのですが，なかなか手に入りにくいのでとりあえず楽器屋にあったもので一番薄いものを選んでいきます。

先に述べたように極めればきちんとした楽器なのですが，小生としては余興レベルに止まりそうな気がします。興味があればお声をかけていただければ，お見せしてほんの少しだけ演奏いたします。

◆ダブルリード楽器～箏篋(ひちりき)～

1. ダブルリード楽器とは

ダブルリード楽器はリードが2枚ある楽器ですが，2枚が完全にバラバラではなく，重ね合わせてあるところに息を吹き込んで音を出します。オーボエやファゴットが有名ですが，音を出すのがむずかしいといわれています。小生はオーボエには興味があり，吹いてみたいとは思っていますが，これまでは触ったことがありません。リードの材質はやはり葦が一般的で演奏の前に水に浸してから(箏篋については後述)演奏します。

2. 箏篋(ひちりき)

学校で雅楽の楽器として習いますし，最近では東儀秀樹の演奏で有名になっていますので，名前を知っている，あるいは演奏をテレビやCDなどで聞いた，という方は多いかと思いますが，実物を近くでご覧になられた方はほとんどいらっしゃらないのではないかと思います。正確には現在使われている箏篋は小箏篋にあたるらしく，大箏篋もあるものの現在は使われていないようです。箏篋は写真7に示すように，20cm位の短い楽器です。雅楽の管楽器は笙(しょう)，龍笛(りゅうてき)とこの箏篋の3つですが，笙は天から差し込む光，龍笛は天と地の間を泳ぐ龍の声，箏篋は地に在る人の声をそれぞれ表すそうです。これを買ったのは東儀秀樹の演奏が好きでCDを買ってよく聞くようになっていたところに楽器店(錦糸町の島村楽器)で見かけたので，これまたぜひひいじってみたいと衝動買ったという流れがあります。

箏のリードを蘆舌(ろぜつ; 蘆舌とも書く)あるいは単に舌と呼びます(写真7-下段左)。写真向かって右側に巻いてある紙を図紙(ずがみ)とよび、ここを本体にぴったりと差し込みます。蘆舌の途中に巻き付いているのが責(せめ; 世目とも書く)と呼ばれるもので、これで蘆舌の開き具合を調節します。この責のところまで口にくわえます。なお、先にダブルリードのリードは水に濡らしてから使用すると書きましたが、箏の蘆舌はお茶に浸すことになっており、お茶の渋みが蘆舌を強くするそうです。ダブルリードの楽器に含められていますが、蘆舌は葦の筒をつぶした形で両端は離れておらず、2枚に離れてはいないので、小生としてはダブルリードというより輪状のリードなのでリングリードとも呼ぶのが正確かなと思っています(写真7-下段右)。本体は漆を塗った竹が一般的ですが、小生の持っているものは初心者用の樹脂製です。穴が上に7つ、下に2つ開いており、左手の小指以外は穴を押さえるのに使います。裏に2つ穴が開いているのが他の楽器にはない特徴のようにも思います。音域は1オクターブとちょっと(西洋音階でいうとソから1オクターブ上のラまで)です。箏の演奏の特徴は、東儀秀樹などの演奏をよく聞かれる方のご存じかと思いますが、音程をゆらがせたり、連続的になめらかに変化させたり(ポルタメント)するのが特徴でこれを塩梅(えんばい)と呼んでいます。

小生の経験ですが、意外に最初から音が出せました(調整済みの蘆舌が付いているものを購入)。ただ、吹き込んだ息が音のエネルギーに変わる効率が非常に悪くすぐに息が切れてしまいます(ほとんどの息が蘆舌の振動に使われず、素通りしてしまっている)。他の管楽器に比べて小さな楽器なのにむしろかなり大きな音がでるため、一戸建てに住んでいない小生としてはなかなか思い切って練習できない環境なのと、インターネットでみると箏は誰かについて習



写真7 箏

下段左：蘆舌全体、下段右：蘆舌上から

わないと独学では無理、と書いてあったので(買ってから気がついていますが…),少しあきらめてしまい、しばらく手を付けていなかったら、今回本稿を書くにあたり吹いてみたところ、蘆舌の管理が悪かったため、まったく音が出せなくなってがっかりしています。ただ、これもインターネットの検索ですが、結構愛好者は多いようで、興味深い楽器ですので、改めて蘆舌を購入し直して、いつか習いに行こうか(渋谷のヤマハでレッスンが受けられるらしい)と密かに思っています。

今回はこれまでとしたいと思います。独断と偏見に満ちた体験談に長々とおつきあいいただいた方ありがとうございます。もし、ご興味持てたら次号もお読みいただければ幸いです。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思ます。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。